

---

# 東方稲子神

アポリオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方稲子神

### 【Nコード】

N8030Y

### 【作者名】

アポリオン

### 【あらすじ】

どうもアポリオンです。メインの「とある死神の娯楽遊戯」が行き詰ったので、気晴らしにちまちま更新していきます。いわゆる東方の短編集です。

## そうだ、牛乳を飲もう その1（前書き）

内容には全く関係ありませんが、最近この二人が愛し合ってれば世界が少しは平和になるんじゃないかって気さえしています。

## そうだ、牛乳を飲もう その1

がりがりがりがりがり……

「ムラサ、ストップ」

縁側で足をぶらつかせながら噛むことおよそ30分。かじっていたら肉まで届きそうだった。

私はイライラすると爪を噛む癖がある。爪を切る必要がないくらいに噛む。

もう何年ちゃんと切っていないか分からない。おかげで先っぽはいつもガタガタ。でもそのうち自然と削れて丸っぽくなってくから困らない。

けどイライラしてなくても無意識に噛む癖がある。だからホントにいつもガタガタ。

「これダメだって……私が切り揃えたげる」

「いや、別に困ってないからいいわよ」

ぐいと手を掴まれ引き寄せられる。顔近い、顔近い。

「だあめ。私が許さない。女の子なんだから指先にも気い使ったことよ」

「そういつのとか、あんま興味ないし」

「だあーめ。ムラサがよくても私がいくくない。可愛くしたげるって」

余計なお世話だ。私は海に生きた女。そして今は聖と仏に仕える身だからそういうのはいらない。

私自身、もとから興味ない。男を誘惑するための飾り付けなんて私はいらないのだ。余分なことはしたくない。

まっすぐに、清く正しく、まじめに生きていけばいい。

「何でそんなことするのよ」

「ん？ 好きだから」

いつもそうだ。私にちよっかいかけてばかり。世話焼き。おせっかい。

何で？ って尋ねればいつも決まって「好きだから」。悪戯の免罪符みたいに言わないで欲しい。

仏頂面だったりニヤケ顔だったり。そんな軽々しく挨拶みたいに言う言葉じゃないんじゃない？ 知らないけど。

何考えてんだか。まったくもって正体不明。いや意味不明。

私は好きって感情なんて分かんないからいつも困る。困惑して、戸惑って、面倒になって考えるのをやめる。

ヤツは可愛らしいピンクの小さな爪切りを持ってきた。ほら、手出してと催促されて反射的に手を差し出す。

エスコートでもするみたいに恭しく握られて手のひらにキスされる。髪の毛が当たってこそばゆい。

「私のこと、ちゃんと見てくれますように」

「今こうやって見てるじゃない……」

「それは違うよムラサあ」

手首のあたりをざりざりと舐めてきたので叩いて躡けた。

まったく舌が動物なら行動まで動物なんだから。だったら叩いて躡

ないと。

「そういう悪戯はいいから。そんなんするなら私、席立つわよ?」

「いや、ダメダメ。そんな手してたら自分引っ掻いちゃうでしょ?」

「引っ掻かない!」

「腕のどこ、かさぶた作ってるのに? ほうら、大人しく切られちゃえばいいのよ!」

ぱちん、ぱちん。と白い半月が飛んでいく。噛み切れず残った部分が綺麗に丸く切り取られてく。

あれってどこに行っちゃうんだろうね。目で追ってても分かんない。見失う。あ、床に落ちた。これ踏むと足痛そう。

鼻歌まじりに手際よく切っていくコイツが恨めしい。しかも無駄に上手いから余計腹立つ。

鼻歌に合わせて羽が動くからそれを眺めて目玉をきよるきよる。ぐるんと一回転。

何でこんなヤツに好きに爪切らしてんだろ。この手をぴっと引っ張って逃げたらいいじゃない。

いや、違うよ。逃げる必要なんてない、ただ帰るだけでしょ。自分の部屋戻って後片付けの続きとか。

台所でおゆはんの支度とか、庭先の洗濯物取り込んだりとか。やることはいつでもあるんだし。私だってヒマじゃないし。

離して、離してよ、離せよ、この……

「ぬえ!!」

「ん?」

「……早くして、じゃないとまた噛んじゃう」

「ん、了解であります船長!」

こういうときだけ調子乗らないで欲しい。なーに笑ってんだか。爪の断面をやすりでしゃこしゃこ削られる。白い粉がいっぱい飛ぶ。いけないお薬みたい。

指の腹でいっこずつ触って削れたか確認してる。早くしてよ。イライラするんだから。

足の指を閉じたり開いたりしたり、擦り合わせたりして居心地の悪さを紛らわす。

上を向いて、天井の木目を数えてやりすごす。私は何にイライラしてるんだろう？

たぶん私にしてる。というか何でか分からないことに分かんなくて、分かんないからイライラしてる。

……自分の分かんない考察が一番分かんない。

聖とかの前ならこんなことならないのに。じゃあコイツのせいね。決めた。私なんかの相手してるヒマ妖怪にイライラしてる。

「ムラサの爪って綺麗：ほら、まっすぐにピンと伸びてて歪みが無い。表面も削ったらこんなにピカピカになったよ！」

「うえ？」

「いいなー惚れ惚れしちゃう。じゃあ反対もね。これ終わったらマニキュア塗ろうねー」

「い、いやだっ！」

そんなの……かじれなくなっちゃう……！

「ふふん」

コイツの真っ黒いマニキュアを塗った指が私を掴んで離さない。

じったばったと暴れても余裕の表情でぱっちん、ぱっちん。妖怪ってこんなに力強いんだ。

にひひと笑う口から覗く牙を何とかへし折ってやりたいと思って、作戦を練ろうと思って、大人しくした方が得だと思って、だから静かにした。

私の爪がなくなっていくんだからコイツの牙もなくなってもいいはず。また生えてくるんだし、いいでしょう？

表面を目の細かいやすりを使い、至極楽しそうに削っている。粉を払うためにふーって息を吹いて最後に手で払われた。

表面を触っては満足そうに笑ってる。真っ黒いマニキュアと、真っ黒い服、真っ黒い髪。いやだ。

「……黒はいやだからね」

「そんなに私のこと嫌い？」

「……………」

「じゃあ、好き？」

「まさか！」

私に分かるはずがない感情を、よりによってコイツになんて。

「じゃあさ、これ塗ろう。透明でラメ入りで可愛いよ。あんまり派手じゃないしこれならムラサもそんなに抵抗なくできるんじゃないかな」

だって塗るの初めてでしょう。ってクスクス笑ってる。馬鹿にされた。きらきら光る小瓶を揺すって、羽が楽しげに躍っている。

分かった、やっぱり嫌いだ！　だってだってこんなにもイライラする。嫌いよ！　似合うなんてお世辞言っても騙されないからね。

「黒なんて、嫌いだあ……………」



マニキュアは、つんとアルコールの臭いがする。あんまりお酒好きじゃないからこの臭いも好きじゃない。

いや、あのお酒は好きなんだけどあんまり強くないから、つまりまあお酒は好きじゃない。とも言える。かもしれない。という負け惜しみ。

「サクツと塗ってよね。貴重な時間なんだから」

「私たちにとって時間なんてあるようで無いものでしょう？」

「違うわよ、ちゃんと人としての感覚は忘れちゃダメだって聖言ってるじゃない。私含めてアンタ以外、みんな規則正しく生活してるわ」

「私は好きなことしかしたくないから、みんなと時間合わせてないんですー。あと夜行性なので」

そんなの言い訳にしていいいわけない。

夜行性っていうなら星やナズだって本来そうだろうに。一輪だって雲山だって妖怪なんだからほんとに夜が得意なんだ。

それを何十年、何百年という歳月をかけて修正してきた。コイツにだってできるはず。

なのに自らの意志で不規則な生活をしてるなら論外。もう勝手にしてくれ。

聖が優しいのは知ってるし良いことだけど、何でこんなへんちくりんを一緒に住まわしてるんだろ。

こんなのだったらよくその辺をふらふらしてる傘の子の方がいいんじゃないの？

「アンタなんでこの寺いんのよ」

「だから、ムラサが好きだから」

これしか言えないの？ 悪戯がバレたときの言い訳ってたくさん考

えないのかしら。

ぐるんぐるん脳みそが混乱してる。コイツと喋ると疲れる。そうしてる間にもせつせかマニキュアが塗られていく。

私の爪が今までにないくらいに、キラキラって輝いていた。あかぎれ、まめ、切り傷、擦り傷なんかが常だった手に似つかわしくない爪。

さっきまで噛んでたなんて信じられないくらいにキラキラでピカピカだった。

……なんだかちよつぴり、こういうのも悪くないかもね。

「ささくれもいっばいだね……これ自分で剥いてるでしょ？」

「だって噛むと皮膚はがれるし。それ邪魔だし。イライラするし」

「もつと自分大切にしなよ」

「どうせ死なないからいいのよ」

もう死んでるし。幽霊だし。なのに妖怪だし。というか爪とかささくれくらいで如何にもなんないし。

腕ぶつちぎれても時間経ったら治るんだから。私たちはそういう存在でしょう？

「私が嫌だから。やめて」

「なにそれ……勝手すぎる」

「はいはい、何とでも言っておきな。塗れたから10分くらい動かさないでね」

ぼふつと私の胸に飛び込んで言った。

最後の方はもごもご言っておあんまり聞き取れなかった。え？ なにしてるの？

「柔らかい。あつたかい。ぱふぱふ、ぱふぱふ」

「ねえ……今度、風呂入るときは気をつけなさい。知ってるかしら。生物はたった洗面器一杯の水だけでも溺れることができるのよ?」

「それは怖いね」

そのあと爪が乾くまでの約10分。コイツは私にしがみついていた。だから最後に一発叩いておいた。

躰はちゃんとしないと。というか、ほんとに沈めてやろうかしら。

そのあと台所におゆはんを作りに行った。

先に一輪がいたから申し訳ないなって思いながら手伝ったけど、何だかいつもと違ってやりにくかった。

変わっていないといえば変わってないけど、気になって仕方ない。手をわきわきと動かして、意味もないのに陽に透かしてみた。ガタガタの部分はきれいさっぱり無くなっていて、かわりにピカピカの指先があつた。

爪が短くなつて困ることがある。袋を開けるのがやりにくい。気になつてしょうがない。

なによりも齧れない。一度齧ってみたが妙に苦くてやめてしまった。でも。写経をするとき、筆を握っても痛くない。皮膚をぽりぽり掻いても血が出ない。頭洗うのが下手な私は爪を地肌を立てて洗うが今日は?

「痛くない……」

イライラしたから、これからはアイツのおゆはんには嫌いな野菜をたっぷり入れてやることにする。ざまみろ。

そうだ、牛乳を飲もう その1（後書き）

最初はメインでも活躍中のぬえとそのカップリング相手のムラサのおはなし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8030y/>

---

東方稲子神

2011年11月23日21時52分発行